当別新聞

当別新聞販売センター
ASA石狩当別
毎日新聞販売所
〒061－0227
石狩郡当別町園生711
電話
0133－23－2066
FAX
0133－23－2099

http://www.htb.co.jp
（ASA on HTB）
このホームページでは、当別新聞が毎週更新されていてカラーで見ることが出来ます。

日本画の現在～星星会展を観る

大成寺のご住職だった武田昭龍さんから、「星星会展を観たか」という留守電が入っていた。慌てて翌日、道立近代美術館（札幌）で開かれていた「星星会展～日本画の伝統と未来へ」を観に出掛けた。最終日だった。

「星星会」というのは、故高山辰雄の命名で、日本画の伝統と未来について対等の立場で話し合い・競うという趣旨に賛同して付けた。自由な立場で創作活動している四名～牧進（１９３６年生）、田渕俊夫（１９４１年生）、竹内浩一（１９４１年生）、下田義寛（１９４０年生）～が集い、２００５年より隔年で新作日本画を展覧してきた。８年間の活動を経て、今回の第５回展をもって終了する。

最後の星星会展は、新作も含めて５回全ての作品が一望出来る全国巡回展である。

仲間内の持たれ合い、グループ展のぬるま湯的なものは、ここにはない。「まるで他流試合のような緊張感があった」と、竹内浩一がいみじくも語っている。作風が異なり、意欲的な作品が多い。それ故、伝統とモダニズムの結合という日本画の課題を模索する作品が多く、日本画の「現在」の一端を知ることが出来た。

秋の風景なのか、黄土色を基調とした画面に、陽光が、ススキが、干柿が描かれた「朝寒」「朝陽光」の牧進。田渕俊夫「刻」、ボクは大都会ビル群の夜景を描いた日本画を初めて観た。シマウマ、牛、猿、狐、ヒョウなど竹内浩一の動物画は朦朧としたラインで独特な輪郭を捉えて、名状しがたい印象があった。それらの作品に「嫉妬」とか「しなる」などと画題が付けられていて絶句する。

現在、「日本画」と「洋画」とを区別する基準は著しく曖昧になっている。しかし、《「日本画」という言葉に含まれる民族意識とつながった特殊な心理的意味合い》（辻惟雄『日本美術の歴史』）は、戦後の国際社会の中にあって、寧ろ敏感に意識される。

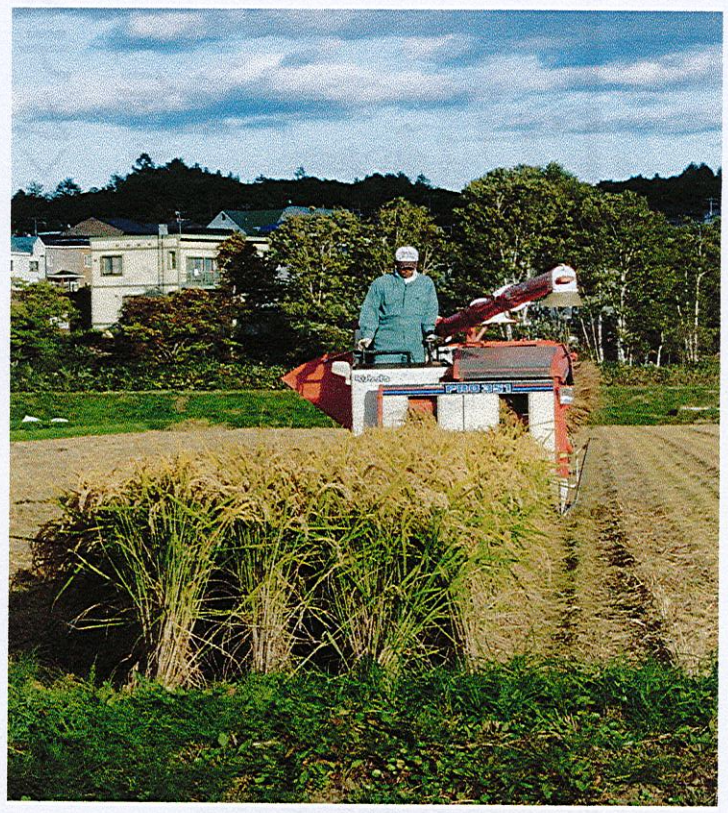
ボクは、明治以来の「金持ちの嗜好に合わせた保守的な日本画の宿痾（しゅくあ）」に嫌悪感を持っているが、この「意味合い」に現代の日本画の存在価値があるとも思っている。

さてそれでは、「星星会展」の全体は、その「意味合い」に肉迫していたか。思うに、その志向を、あまり強くは感じられなかった。

「星星会展」を観ながらボクは、奄美に移住し、極貧のなかで、その自然と風土を描ききって、ひっそりと逝去した孤高の日本画家田中一村のことを想っていた。（清水三喜雄）

天高く、秋⑤

豊年の雀青空より降りぬ　（岸　風三楼）



当別町赤十字奉仕団の友愛セール！

当別町赤十字奉仕団のリサイクル市「友愛セール」が、二〇日（金）白樺コミセンで開かれた＝写真。開場前から列ができるほど、いつも人気の集りである。

毎年七月と九月頃、農家の主婦らが、少しでも手が空くこの時期に、友愛セールは開かれる。

なんと言っても、赤十字奉仕団のユニホーム（？）である白い割烹着と日本手拭いの姉坂振りが、いつもながら実にいいのである。

扱っている物は、特別変わったものではない。日常の生活に役立つ食器やグラス、特に子供用衣類、着物と帯というのはいかにも友愛セールらしいか。バックに履物、大人用衣類も勿論ある。

ただ何となくノンビリしている雰囲気が他のリサイクル市やフリーマーケットには無くて、つい友愛セールを覗いてしまうのである。

じぇじぇ、湯たんぽだ、懐かしいものを売っている。

当別短歌会詠草（九月）

みなみ風きりをまじへて沼渡りあはくはかなき片虹の立つ　坂田資宏

帰省した孫が好まる野苺に薯掘りを終へて眺むる夕あかね雲　庵浅子

今日ひと日晴れの予報に薯掘りを終へて眺むる夕あかね雲　大澤隆子

くもり空彩どり豊かに染めて舞ふ風船あまた子等の夢のせ　山田幸子

長雨に生れし運命にあらがはず鳴けない蝉はアスファルト這ふ　西口悦子

盛り上がる福祉まつりの大空よ夢とりどりの風船放つ　大口ひろみ

伸び来る稲穂に花の咲くころよお盆と祭りの重なるわが町　吾妻文子

朝露に光りを受けて野の草が白くいよいよ輝きをます　長谷川晴枝

汚染水不安のさなかオリンピック東京開催決定くだる　後藤まゆみ

変はりたき内なる我もるたらしく駅伝に出むと答へてしまひぬ　磯石万里

老いふたりこの先なほもつつしみてひと筋の道迷ひなきやう　山田道乃

新十津川終着駅に花満ちてのどかに子馬餌食みをりぬ　丸山牧子

うす曇るリナリアの丘わたる風清やかに咲く白とむらさき　井上みつ

当別町週間行事予定

二十九日（日）自衛隊協力会創設五〇周年記念行事（白樺コミセン　午後二時）

とうべつ軽トラ・マーケット（ローソン当別樺戸町店前　午前九時）

とうべつさわやか駅伝（石狩当別駅前　午前九時半）

三〇日（月）町長の聞かせてご意見（応接室　午前八時半）

当別町キッズ運動会（白樺コミセン　午前十時）

農業委員会総会（役場第二庁舎　午後三時）

一〇月二日（水）親子エンジョイパーク（総合体育館　午後一時）

ストックウォーク（総合体育館　午後一時半）

チャレンジ・ヨガ（全久寺　午後七時）

三日（木）歯科健診・フッ素塗布（ゆとろ　午後一時）

法律相談（ゆとろ　午後一時半）

四日（金）バランスボール教室（総合体育館　午前十時）

五日（土）青少年スポーツの時間・西当別コミセン無料開放（午前中）

〈旅システム〉劉連仁記念碑ツアー、当別で「伝える会」と交流！

旅行会社「旅システム」（札幌市東区）が企画した「劉連仁記念碑ツアー」一行三十二名が、九月十六日（月・祝）当別町にやって来た。

一行は、劉連仁生還記念碑（若葉）に献花した後、若葉会館で昼食をとり、「劉連仁記念碑を伝える会」の会員らの説明を受け、参加者の交流を深めた。

今年は劉連仁生誕一〇〇周年、当別の山中で「発見」され奇跡の生還を果たしてから五十五周年の節目ということもあって、グループや団体、個人で劉記念碑を訪れる人があとを絶たない。

アジアへの戦争加害責任や謝罪を拒み、不戦の誓いもしない首相やナチスの手法に学んで憲法を変えろという副総理が権力の中枢にいて、集団的自衛権や恫喝的な秘密保護法を導入しようとしている危険な動きが顕在化しているなかで、強制連行され数奇な運命を辿った劉連仁の生涯を通じて「戦争と平和」を考えよという機運も、その背景にある。

「伝える会」の三上勝夫会長から、劉連仁「発見」の経緯や生前の劉さんとの交流などが、大嶽事務局長からは町民の草の根運動によって建立された劉記念碑の歩みなどについて説明があった後、参加者の交流が行われた。札幌だけではなく、苫小牧や小樽、岩見沢などから参加した人たちは年配の方々が多く、一人一人のお話が自分史と重ね合わせて劉連仁に思いを馳せる話が多く、大変に面白い。二時間ほどでは語り尽せない。

ソウル生まれで小学六年生まで北京で暮したという男性（八十一歳）、旧満州で軍隊経験をし、終戦から六年間中国の炭鉱で働いたという男性（九十一歳）などのお話からは、植民地化した国の民衆への酷い仕打ちと謝罪の気持ちが伝わってくる。

八十一歳の女性は、文化大革命下の中国訪問の体験を語られた。大地が揺らぐような民衆の力を感じたという。

今年のツアーには、北大大学院などで学ぶ中国人留学生五名の参加が特筆される。先月の看護学校（千葉県）の学生四十一名の訪問など、劉記念碑は若い世代にこそ語り継がれていかなければならないのだから嬉しい動きである。

留学生の賈鎮宇（カチンウ　二十五歳）くんと恋人の宋雨桐（ソウウトウ）さんは、ハルピンから日本に来て初めて劉連仁のことを知った、中国の若い世代は劉連仁を知らないと思うと云う。。二人は、仁木町で毎年開催される中国人慰霊祭にも参加して、「日本人が、このように中国人の苦難の歴史を記憶し、記録し語り継いでいることに感動し、感銘を受けました」と語ってくれた。

岩見沢から参加した北海道郷土史を調べている男性は、初めて劉記念碑を訪れたとき、道を聞いても分からず苦労しました、劉記念碑の管理は当別町に移管されているならば、案内板のようなものを立てるよう要請すべきじゃないか、と提案した。

ツアー一行は、伊達記念館や本庄陸男の文学碑「石狩川」などを巡って帰路についた。

（上）初めて中国人留学生五名が参加した（中）記念碑に献花したあと、ツアー一行全員で記念撮影（下）参加者の交流、自分史と重ね合わせたお話が面白かった、若葉会館で

内科　救急当番医

29日（日）堀
30日（月）堀
1日（火）堀
2日（水）近
3日（木）と
4日（金）勤
5日（土）さ

＜平日夜間＞
午後7時～午後9時
＜土曜日＞
午後2時～午後5時
＜日祝祭日＞
午前9時～正午
午後2時～午後5時

堀＝堀江病院（22－3111）
近＝近藤医院（23－2021）
勤＝勤医協当別診療所（23－3010）
と＝とうべつ内科クリニック（22－1313）
さ＝さわざき医院（25－2055）
ス＝スウェーデン通り内科循環器科クリニック（25－3151）

＜CDの紹介＞ 沢田研二『PRAY』（ココロコーポレーション）

1960年代終りから70年代初めにかけてグループサウンズのピークであった「ザ・タイガース」のボーカルとして、解散後はソロとして、ジュリーこと沢田研二（1948年生）の人気は絶大で、J・POPの一時代を画した。しかし、メジャー系の商業音楽に飽き足らず、あえて独立系のココロコーポレーションを立ち上げ（1985年）、独自の音楽世界を求めてきた。メジャー系の空疎な音楽、派手な宣伝の陰で注目されなくなったが、沢田研二は一貫して「現役」ミュージシャンとして歩んできた。その鮮やかな姿が、根強いファンや若い世代も巻き込んだ「沢田研二＜還暦＞全国ツアー」だった。60代の体形を臆することなく曝け出しながら、その艶やかな歌声は健在だった。

静かな衝撃を与えたのが、2008年5月発売のアルバム『Rockn Roll March』に、さり気なく収録されていた「我が窮状」である。改憲の動きに真正面から異議申し立てした曲。憲法「九条」と我が国の「窮状」を重ね合わせて、団塊の世代としての責任を受け止める～《忌まわしい時代に遡るのは賢明じゃない》《この窮状救うために声なき声よ集え》と歌った。沢田は新聞のインタビューにこう答えていた～バンド仲間が「攻められたら守るだろう」と言った時、《いや、一対一の喧嘩と、国と国との戦争は違う。そう思い至った時に、「少しプチッとはじけた。」戦争には、望まない人まで巻き込まれる》と。

歌手や俳優、タレントらが芸能界で「売れる」と、市民としての発言をしなくなる臆病で保守的風潮のなかで、このスーパースターの歌声を驚きをもって聴いた。

そして、2011年3月11日、東日本大震災と原発事故。

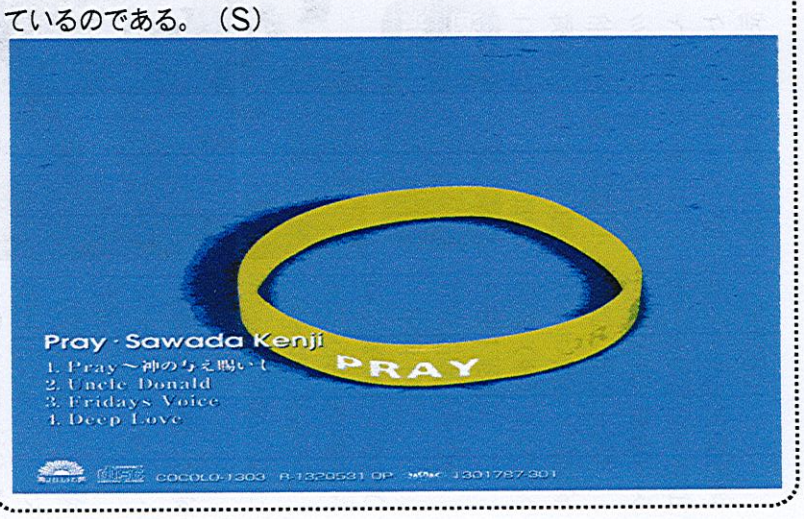
何様のつもりか、上から目線で「がんばろう日本」などと虚しい掛け声を連呼するのと裏腹に、原発事故を直視しない風潮の中で、沢田研二は静に音楽を通して「3・11」以後を思索してきた。それが、2012年3月11日発売のアルバム『3月8日の雲』であり、2013年3月11日発売の、このアルバム『PRAY』である。全曲、「3・11」をテーマにしている。

このアルバムには、「PRAY～神の与え賜いし」「Uncle Donald」「Fridays Voice」「Deep Love」の4曲が収録されている。作詞は全て、沢田研二。

社会的なテーマを直接歌っていながら、ここには高みの見物的な厭らしい上から目線がない。「PRAY」というコトバに象徴されるような、内面的なものに刻み込もうとする精神の動きが感じられる。同情もなければ憐れみもない。人為を越えるものと人為の過ちが惹起した現実への、それでも立ち向かう人々へ「祈る」スタンス～《寡黙な人の声　耳澄ませば　復興を宴に　するなと嘆く　嗚呼》。

特に3曲目「Fridays Voice」がいい。

反原発・脱原発の一点で金曜日の夜、首相官邸前に集い、意思表示し続けた市民たちへの共感を歌っている～《可哀想な原発　行き場のない原発　危険すぎる手におえぬ未来　止めるしか原発》《この国をもっと愛せるよう　今夜集おう　Ah　重ね合わせた誓い　We Are Fridays Voice》。

「この国を」とは、活動再開したサザンオールスターズも新曲で歌っている。しかし、なんと対照的だろうか。「金持ち喧嘩せず」的な、現状維持のぬるま湯的なサザンの「この国は」。今ここにある福島原発事故の危機をまるで何もなかったかのように「この国」はいい、と歌う。何故、現状維持でいいのか。

「3・11」以後の現実を受け止めた、静に熱い叫びが『PRAY』の全体に流れている、しかもここには仲間と作るバンド・ミュージックに拘りをもつ沢田研二の音楽テイストが枯れることなく満ちあふれているのである。（S）